

はじめに

これまで、悪性新生物、心疾患、脳血管疾患が日本人の死因の上位3つを占めてきましたが、2011年から肺炎が脳血管疾患を抜いて死因の3位となっています。その肺炎の一部、いや多くに嚥下障害が関与していると推察されます。医療の進歩により平均寿命が延び、超高齢化社会となっている今、私たちは嚥下障害への対応を求められているのです。そんななか、「嚥下ブーム」「嚥下障害ブーム」と言えるくらい、嚥下障害に関する書籍が刊行されています。昨今の日本摂食嚥下リハビリテーション学会の学術大会では約5,000人の参加者があり、会場の席が足りなくて立ち見ができることも珍しくありません。

これだけ嚥下障害に注目が集まっていますが、医学生・研修医・レジデントに対する嚥下の教育はいかがでしょう？ 充実している施設は一部であり、多くの施設はきちんとした教育体制がとれていないのではないのでしょうか。私が尊敬する臨床医でも嚥下障害には対応できず、言語聴覚士や看護師に任せきりだったりします。リハビリテーション・看護・介護のスタッフに比べて、医師が最も嚥下障害に興味をもっていない、対応ができていないのかもしれない。

嚥下障害の本といえば耳鼻咽喉科やリハビリテーション科の専門医向けだったり、メディカルスタッフ向けだったりするなか、羊土社さんから研修医・レジデント向けの本を出版しませんかと声をかけていただきました。私としても若い先生方にもっと嚥下障害へ興味をもってほしかったので、二つ返事で執筆を引き受けました。

本書は私が研修医・レジデントに病棟で日々教えていることを中心に据え、看護師・言語聴覚士・薬剤師・栄養士に協力をお願いし、とにかく実践的な内容にしております。なかでも一番力を入れたのは**第4章のQ&Aのコーナー**です。嚥下障害例での経鼻胃管や気管カニューレの取り扱い、薬の内服方法、そして栄養剤や嚥下調整食の選択まで、病棟で困る事例を多く取り上げました。これらは明日にでも活用いただける内容だと思います。

本書が皆さんの日常臨床に役立ち、そして嚥下障害に関心をもつ方が増えてくれたら幸いです。

2015年7月

東京慈恵会医科大学附属柏病院 神経内科
谷口 洋